

自 己 評 価 書

四日市市立 大矢知興譲小 学校

1 学校づくりビジョンの重点目標の達成に基づく評価

重点目標 1	確かな学力の定着	4
主な方策 成果と課題	・「四日市モデル」を軸とした問題解決能力向上のための授業づくりでは、授業規律が数年で定着してきており、授業時間を確保することができるようになってきた。また、問題解決の見通しを持たせるために、全校で統一して「課題」と「ふりかえり」の習慣化を図る指導をした。 ・学ぶ楽しさが実感できる授業づくりでは、本校の研修の土台としている「第2プロセス」を大切に、児童が主体的に自分の考えを深めたり広げたりするために特に必要であると思われる「第4プロセス」に重点をおいて取り組んだ。ICTの活用の視点から全教科でタブレット端末を積極的に使い、どのようにICTを活用できるか模索してきた。 ・ICTを活用した教育活動の推進について、ICTの活用回数が増えて、基礎的なスキルが向上した。しかし、職員は、自分たちのできる範囲内で教材を作成するため、ICTサポーター・支援員を依頼するまでの高度な活用とならず、依頼が難しいときがある。 ・ビジョンの重点項目として漢字学習とICT活用を設定し、ビジョンの達成状況をはかる指針の1つとした。どちらの項目も、設定した目標を達成できた。 ・全国学力・学習状況調査、みえスタディ・チェックを実施し、高学年の学習状況をはかる指針として活用した。	

重点目標 2	豊かな人間性の育成	3
主な方策 成果と課題	・人権・同和教育、道徳教育の充実においては、「人権学習」と「なかまづくり」を大きな柱として推進してきた。人権学習では、各学年で重点課題を設定し系統立てた学習を進めることができた。なかまづくりでは、「核となる子」を設定し、そのまわりの児童の変容に重点を置き進めた。道徳教育については、年間指導計画に沿って履修できるように推進を図った。臨時休業による時数減のなかでも、道徳の時間を確保し、各学年で取り組みを充実させてきた。ビジョンの重点項目として、自尊感情の高まりをめざしてきたが、検証結果から昨年度とあまり変わりがなく、次年度も継続して取り組みたい。 ・職員全体で、生徒指導の充実をめざしてきた。いじめ調査やQ U調査等を活用した教育相談の充実を行い、担任だけでなく学年部や管理職と連携して、いじめなどの様々な問題に対応することができた。いじめアンケートを定期的に行い、安心して過ごせる学級・学校づくりの推進に努めた。 ・Q-Uによる分析とそれを受けて児童一人ひとりに寄り添う教育相談を行うことができた。児童一人ひとりの相談を行う時間をいかに保障していくかが課題である。 ・言語環境の充実のため、図書イベントを通じた読書の啓発を行った。校舎改築に伴い図書室が狭い、コロナで人を集めることもできない等があり、読書量の確保・増加には至らなかった。	

重点目標 3	健康・体力の向上	3
主な方策 成果と課題	・体力・運動能力の向上については、運動場が狭く、コロナの影響も受けているため、子どもたちの活動量が少なくなった。運動場が元のサイズに戻ったとき、授業・休み時間ともに、活動量を増やしたい。 ・体育の授業では、めあてやふりかえりをすることで運動に対する意識を高めてきたが、「体育の授業を含めて、運動に進んで取り組んでいるか」のアンケート結果では、肯定的に回答した割合が昨年度よりも3ポイント低下した。主運動につながる5分間運動の実践により、充実した授業を進められるようになってきた。児童が「めあて」と「振り返り」をさらに実感できるように、タブレットPC等を活用していく必要がある。5分間運動や日々の指導については、教師間の実践交流を進めたい。 ・健康・安全意識の向上では、体験活動を生かした安全教育の推進と危険回避能力の向上が図られた。安全教育では、火事、地震を想定した避難訓練を毎学期行い、より安全に避難できる体制を見直すことができた。避難訓練をすることで、初動対応が適切にできるようになった。防犯教室では、警察の方のパワーポイントが見やすかったり、10問くらいの問題や子どもが前に出て実演したりするなど、飽きないように工夫されており、意欲的に防犯を学習することができた。	

重点目標 4	学校教育力の向上	3
主な方策 成果と課題	・校内研修の充実については、各学年で計画や取組、振り返りを毎学期ごとに行ってきた。学年という組織の中で、それぞれの役割を発揮しながら力量や資質を向上できた。学年組織を学校全体に広げて、さらに学校教育力を高めたい。 ・教員が講師役になり、それぞれの専門性を発揮し、校内で共通理解できる場であるミニ研修について、今年度実施回数が減った。仕事量を減らすメリットはあるが、学年を超えた職員間のOJTを積極的に進めていく必要がある。 ・主研修にかかわるICT研修により、教職員のスキルアップにつながり、授業でのICTの活用が進んだ。次年度以降も、内容の充実に留意しながら、研修を進めたい。 ・夏季休業中に特別支援教育研修会を行い、三重大大学の松浦教授にお話をいただいた。研修会後の教職員の満足度も高く、特別支援教育の充実に向けて次年度も同じ講師を招いて研修したい。 ・業務アシスタントの活用が進み、職員の職務内容が変化した。そのため、子どもに向き合う時間の確保につながった。働き方の意識改革が進み、職場の活性化につながった。	

重点目標 5	保護者・地域との協働	3
主な方策 成果と課題	・家庭学習の習慣化に向けた取組の推進として、低・中・高学年で系統立てた方針を示した「家庭学習の手引き」を1学期に配付した。保護者の協力を得るために、今後も加筆・修正して周知を図りたい。 ・校長だより、HP等で学校や子どもの様子を積極的に発信できたことから、保護者や地域との情報共有を図ることができた。しかし、コロナの影響により、学校公開は計画通りには進められなかった。 ・年度初めに募った学習支援ボランティアの活用により、効果的な地域人材の活用ができた。制度として軌道化を図ることができている。教員以外の人との関わりの中で学び、視野が広がったり、子どもへのきめ細かい学習支援により、達成感や成就感につなげることができた。 ・四日市版コミュニティスクールとして「興譲協議会」（学校運営協議会）の充実を図ってきた。保護者・地域との協働の基盤組織として、協議内容の充実にも努めてきた。あいさつの励行など、協議会で示された方向性については学校の教育活動につなげるとともに、協議内容については、その都度職員会議の場で共有を図ることができた。 ・登下校において、多くのボランティアや保護者の見守りがあることで、学校・保護者・地域ぐるみで子どもの安全を確保することができている。	

2 改善方針

○重点目標 1 ・書くことに関して、年度初めに系統図を提案したが、学校としての確実な実施・習慣化までは至らなかったため、授業づくりのさらなる改善が必要である。 ・漢字学習では、6学年中5学年で目標を達成できており、日頃の指導が反映されていることがうかがえた。一方で、低得点層は固定化されつつあり、漢字に限らず、さまざまな場面で課題を抱える様子が見られる。家庭への啓発も含めた支援を工夫していく。 ・市内他校に先駆けて1人1台タブレット、各教室へのプロジェクタセットの配備が完了しており、効果的な運用について校内で話し合いを行ってきた。児童がタブレットに触れる機会は多くなり、授業においてまとめる、共有するなどの活動に自ら取り組むことができている。次年度も、一人1台タブレットならではの取り組みを行い、児童につけたい力をのばしたい。 ○重点目標 2 ・今年度いじめアンケート結果を集約し、職員全体で情報共有することで、より多くの視点で児童一人ひとりを守るように努めた。次年度もアンケート結果の集約を早急に行い、指導に活かしたい。 ・教育相談の時間をしっかりと保障できるように意識して取り組みたい。また、聞き取りを通して児童一人ひとりに向き合い、寄り添っていききたい。 ・朝読の毎週実施、コンテナ貸し出しの全学級実施、学期ごとの学級文庫入れ替え、隙間時間（給食後など）の読書徹底など、読書のきっかけづくりを考えていくなければならない。 ○重点目標 3 ・体力の向上、健康・安全意識の向上をさらにめざしたい。 ○重点目標 4 ・教職員の困り感やその時期の学習への指導方法など、教職員のニーズに合わせ、ZOOMの使い方、拉致問題に係る「めぐみ」の視聴等、OJTの推進に向け、次年度はミニ研修を充実させたい。 ・コロナの影響で、先を見越した情報提供・提案が十分でなく、直前に知らせることがあった。職員が提案後に仕事することを考え、先を見通した提案をしたい。 ○重点目標 5 ・「家庭学習の手引き」を家庭学習のやり方や帰宅後の過ごし方がさらに定着できるよう、年度初めに配布・指導し、通信などで家庭の協力をお願いしたい。また、学習環境整備の継続的な啓発を進めたい。	
---	--